翻訳という世界

船越　隆子
翻訳家

レジュメを作る　書籍化への第一歩

〈7〉

先日、テレビのトーク番組にタレントで映画監督の北野武さんが出ていた。映画のストーリーを考える際には、4コマ漫画のようにまず起承転結となる場面を考え、そこから枝葉をつけていくそうだ。

それを聞いて思い出したことがある。

翻訳とは、既成の外国語の文章を日本語にする（あるいはその逆）仕事だけれど、実はその前に、自分で文章を書くという作業もある。

それは、レジュメを作ること。「シノプシスを書く」と私たちは言う。それが、翻訳本を出す上での第一歩となる。

正確には、この場合のレジュメとは、原書のあらすじと感想に、類似の書籍が国内で既に出ているかどうか、などの情報を加えて、原稿用紙20～30枚にまとめたものだ。たいていは出版社に提出する。そして出版社が、その本を翻訳して出版するかどうかの重要な判断材料になる。

レジュメを書く者の責任は重大だ。「すごく面白かった」と絶賛して、それなら出版しようということになって書籍化されて、もし売れなかったら、出版社に多大な損失を与えてしまう。

だから、できる限り冷静な目で読み、そのストーリーを的確にとらえなければならない。

あらすじの起承転結を公正な目でとらえ、感じたことを書く。けれども、単なる読書感想文ではない。感情に流されて、感激したとか面白かったというだけではいけない。翻訳して国内で出版した場合、書店の店頭に並んだ本に人々が関心を持ち、買おうという気になるかどうかの基準となる「感想」が必要なのだ。

もちろん、個人的な「面白い」という感情を無視してしまうわけではない。一読者としての素直な思いは大切にしつつ、一般読者の感覚に思いをはせる。

そして、出版が決まった暁には、レジュメを作った本人が、そのままその作品の翻訳を任されることも多い。

また、翻訳家が、面白いと思う原書を自ら探し出してきてレジュメを作り、出版社に売り込んで出版にこぎつける場合もある。

でも私の経験からは、レジュメ作りは、いわば翻訳家の登竜門というイメージが強い。駆け出しの翻訳家はまずレジュメを書く仕事を与えられ、その出来具合で、翻訳者としての技量を判断される。翻訳家にとっては、原書を短期間に読んで理解し表現するという鍛錬の良い機会でもある。

だから、私も今まで数多くのレジュメを書いてきた。通常は2週間くらいで1冊の本を読んでレジュメを作成する。

こんなレジュメ作りもあった。

英語版でもまだ本になる前の「原稿」の段階で、400ページもある大作だった。その分厚い束を机に置き「さあ、読むぞ」と意気込んでみたものの、1ページ目を読んだだけで「これは日本では売れない」と分かってしまった。

「アメリカの食事情は乱れている」という内容の本で、興味深い情報もあったが、それにしてもこの内容で400ページもある本を、日本でいったいどんな人が読むだろうかと考えた場合、採算の取れる出版は無理だと感じた。結局、出版は実現しなかった。

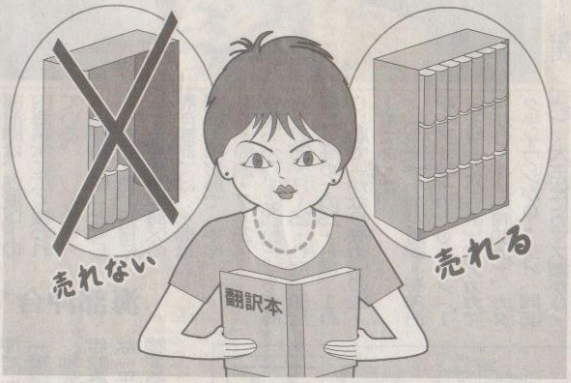
こんな思い出もある。それは、南米のアリの生態を人間の集団生活と比較して書いた自然科学系の本だった。かなり分厚かったが、イラストも入っていてなかなか面白い本だと思った。ただアリの生態という特殊なテーマだったので、それなりに慎重なコメントのレジュメになった。

ところが数年後に、たまたま書店でその見覚えのある表紙を見つけた。翻訳されて出版されていたのだ。よく売れたかどうかは知らない。でも、自分の書いたレジュメが参考にされて出版までこぎつけたのかと思うと、感慨深かった。

こんなふうに、もしレジュメが評価されて、めでたく出版の運びとなっても、そこから翻訳が仕上がるまでに最低でも2～3カ月かかる。その後、3度以上繰り返す校正作業に数カ月。出版社の事情も加われば、完成までにはさらに数カ月、へたをすれば数年かかることもある。

書店に並んでいる翻訳本には、原書ができるまでの苦労と、そこからさらに日本語版ができるまでの苦労という2倍の手間と時間がかかっている。

（徳島市在住）



イラスト・青木　憲司

面白さや採算 判断材料に